

大学生のEQとCB-Eの関連性 —「施設実習事前指導」に活用するために—

藤 京子 木村 たき子

Relation of EQ and CB-E in Junior College Students :
Application to the Practice in Welfare Institutions

Kyoko FUJI Takiko KIMURA

本稿では、K短期大学の保育士資格を取得する2年生を対象に、EQテスト（情動指数）とCB-Eテスト（対処行動エゴグラム）を実施し、どのようなタイプの学生が多いのか、その傾向を考察する。

この結果を踏まえて、保育士資格を取得する学生の必修である、保育所以外の児童福祉施設及び知的障害者施設での実習（以下、施設実習という）を、不安やストレスを抱えずに実施できるようにするには、どのような指導が必要なのかを導きたいと考えている。

実習に行く前におこなう「施設実習事前指導」の中で、今回の結果を活用しようとするものである。

はじめに

K短期大学は、小学校、幼稚園、保育士の免許資格取得が可能な短期大学である。免許資格を取得するためには、2年間という短い期間に現場での実習が数回課せられている。

その中でも保育士資格取得学生は、施設実習を実施することが必修となっている。学生のほとんどは、児童福祉施設や知的障害者施設がどのような目的を持った施設なのか等、知らないのが現状である。とりわけ余り馴染みのない知的障害者施設での実習は、地域にその施設が少ないことが起因してか、身近な存在としてとらえにくいようである。したがって、知的障害者施設へ実習に行く学生は、特に難色を示す者が多く、ストレスを感じながら実習へ行くように思われる。特に、現代の若者はストレスに弱くストレスに対する対処行動の取り方がわからないとも言われている。

本稿では、EQテストとCB-Eテストを実施し、関連があるか否かを調べることによって、関連のある項目内容に力点を置き、「施設実習事前指導」の講義を展開していきたいと考えている。できるだけ不安やストレスを抱えずに実習に臨めるような「施設実習事前指導」が

おこなえないものかを探るものである。

EQテスト（情動指数）とCB-Eテスト（対処行動エゴグラム）とは、どのようなテストなのかを示しておく。

1. EQとは

英語のemotionalを日本語では「情動」と訳しているが、Goleman,D.の原書ではそれが心理的な意味での情動にとどまらず、その上位概念である感情全般の意味にも使われていることもあり厳密ではないが、突発的な反応を含め、「人をしてなんらかの行動に駆り立てるような感情の作用」といった、やや漠然とした広い意味で用いている。

EIの基礎的研究は、1990年から1993年にかけてMayer,J,D とSalovey,PのEmotional Intelligence（情動知能・EI）に関する研究がおおきな原動力となっている。このEIの概念は科学的研究のトピックとされ爆発的関心と呼んだ。その理由として、①EIが時代精神にフィットすることである。②EIが高ければ学問的な才能に恵まれていなくても人生でおおきな成功を収められるかもしれないことを示唆している⁽¹⁾ということが考えられる。

その後、1994年から1997年にかけて、科学ジャーナリストのGoleman,D.の、学術論文とは異なるスタイルで一般向けに書いた『Emotional intelligence:Why it can matter more than IQ?』が出版された。タイム誌は、この時EQ（情動指数）という造語をつくりこれが一般に広まったのである。1995年にGoleman,D.著書の“Emotional Intelligence－Why it can matter more than IQ－（情動的知能，なぜIQよりも重要なのか）”（邦訳『EQこころの知能指数』土屋京子訳・講談社・1996）は全米でベストセラーとなり、雑誌「TIME」（1995年10月2日号）が特集を組み「EQ」というキャッチフレーズの表現を使ったことから「EQ」という言葉が一躍注目されるようになった。原書の中では、著者自身は「EQ」という言葉は使ってはいないのであるが、「人生で成功できるかどうか、本当の意味で聡明な人間かどうかを決めるのは、IQだけではなくてEQの高さだ」と書いた「TIME」誌の記事が全米で話題を呼び、「EQ」という言葉が一気にアメリカ社会に広まったのである。

Goleman,D.の「EI」という言葉や概念は、イエール大学のSalovey,Pやニューハンプシャー大学のMayer,J,Dによる、“Emotional Intelligence”が基礎になっている。Salovey,Pの“Emotional Intelligence”の4下位概念は、(1)感情抑制（能力）、(2)感情の理解と分析（能力）、(3)感情による思考の動機づけ、(4)感情の知覚・評価・表出に統合されていて、これまでの研究は何らかの原因で生起した感情が遂行中の認知過程に影響するという発想であった。しかし、Salovey,Pの“Emotional Intelligence”では、個人が自分の感情をポジティブの極からネガティブの極まで積極的に操作・統合することにより、認知のモードを切り替え、より柔軟で広い視野からの処理を可能にするということが考えられたのである。そして、

Goleman,D,はその著書の最初のほうで、人間の行動はIQだけでコントロールできるものではなく、むしろ、emotionalに左右される場合が多いという点に、もっと注目する必要があると強調している。

現在、EIの研究第1人者とされているMayer,J,DとSalovey,Pは、「情動知能とは、情動の意味および複数の情動の間の関係を認識する能力、ならびにこれらの認識に基づいて思考し、問題を解決する能力をいう」としている。すなわち、情動知能を、情動を知覚する能力、情動(emotion)から生じる感情(feeling)を消化する能力、情動からの情報を理解する能力、情動を管理するもの⁽²⁾と、定義している。

それに対しGoleman,D,は、社会生活を営むうえで社会的知能の重要性を説き、それは①自己の情動を知ること。②情動の管理。③自らの動機付け。④他者の情動の認識。⑤人間関係への対応。の5つの領域から成り立っていると定義している。⁽³⁾今回使用のEQテストは、大村政男版EQテストを改良した「KIMURA版」を使用している。これは、①共感性。②自己認知力。③自己統制力。④粘り強さ。⑤柔軟性。⑥楽観性。の6つの領域なら成り立っている。

1-1. 「KIMURA版EQテスト」

これは、72の質問項目からなり、6個のEQファクターで構成されている。6個のEQファクターは以下の通りである。

- 第1因子：共感性（ことばやコミュニケーションで、他の人たちのところを知ったり、その人と同じように感じたり、その人の気持ちを察する）
- 第2因子：自己認知力（自分自身をよく知ること、身のほどを知ること）
- 第3因子：自己統制力（自分の欲求や動機をコントロールすること）
- 第4因子：粘り強さ（我慢強い人、欲求不満に対し忍耐力があり、衝動的でない）
- 第5因子：柔軟性（物の見方、考え方が柔軟かで創造的である）
- 第6因子：楽観性（ネアカな人、ものごとを暗く考えず明るく考える）

これらの質問項目に対して「YES」「NO」「？」の3件法で解答してもらう。それぞれの質問項目の得点は、YES＝2点 NO＝0点、？＝1点とし、合計点を出す。

2. CB-E（対処行動エゴグラム）

CB-Eとは、Coping Behavior Egogram（対処行動エゴグラム）の略で、芦原⁽⁴⁾らによって開発されたものである。このテストは、桂式自己成長エゴグラム（Self Grow-up Egogram：SGE）の質問内容と質問文を変えたものであり、SGEが生活全般にわたる行動

パターンを評価するのに対し、CB-Eは、より限定された一定のストレス状況下での対処行動を把握できるようにしている。

これらは、交流分析（エゴグラム）がベースになっている。人の心には3つの領域があると考えられ、1つは親の心P（Parent）、大人の心A（Adult）、そして子どもの心C（Child）である。親の心Pは、父親の心CP（Critical Parent）と母親の心NP（Nurturing Parent）に分かれる。子どもの心Cは、自由な子どもの心FC（Free Child）と順応する子どもの心AC（Adapted Child）に分かれる。このように、人の心をCP, NP, A, FC, ACの5つの領域に分けて考えようとしたものである。

個々人の性格や年齢、生活環境によってそれぞれの領域の優位や不足があり、得点の高低により特徴を見るものである。

2-1. CB-Eテスト

設問1)では、最近体験したストレスを記入してもらう（自由記述）。設問2)は、ストレス状況下でとった行動を「○」、「△」、「×」の3件法で解答してもらう。その時にとった行動か否かを把握することが必要なために、△は記憶が曖昧な場合以外は、できるだけ付けないようにする。

設問は40問あり、○=2点、△=1点、×=0点とし、合計点を出す。それぞれの設問は、f-CP、f-NP、f-A、f-FC、f-ACの項目に当てはまるように考えられている。

f-CPとは、信念に従って行動する厳しい父親のような親の心である。自分の価値観や考え方を優先して理想を求める。f-CPが強すぎると尊大で批判的になりがちだとされている。

f-NPとは、思いやりを持って世話をするやさしい母親のような親の心である。親身になって人の面倒を見る優しさが特徴である。f-NPが強すぎるとおせっかいになる。

f-Aとは、事実に基づいて物事を判断しようとする合理的な大人の心である。データを集めて理論的に処理をするようなタイプである。f-Aが強すぎると打算的で冷たい人間にみられる。

f-FCとは、自分の欲求のままに振る舞い自然の感情を表す自由な子どもの心である。明るく無邪気で行動的である。f-FCが強すぎるとわがままで他人への配慮に欠けてくる。

f-ACとは、自分の本当の気持ちを抑えて相手の期待に応えようとする順応した子どもの心である。f-ACが強すぎると、イヤなことをイヤと言えずにストレスをため込むことになる。

3. 研究の目的

保育士資格を取得するためには、保育所での実習のほかに「施設実習」が必修である。保

育士という、保育所の職務であることは誰もが理解していることであるが、保育所以外の施設における保育士（以下、施設保育士という）という職務に繋がらないのが現実である。

保育士資格は、保育所だけでなく、保育所以外の児童福祉施設や知的障害者施設においても生かされる。殊に、子どもの健全な成長や発達に関しては、生活を通して援助するという立場から、施設保育士として最も中核的な役割を担っており職域が広い。しかし毎年、必ずといってよいほど、「なぜ保育士資格を取得するのに、施設実習が必要なのか」という質問から「施設実習事前指導」の授業が始まるのである。

その一方、K短期大学の学生は、施設実習を終えた後に施設保育士として就職活動をし、実際に福祉施設へ就職する学生の数も、平成17年度、就職希望者155名中2人、平成18年度、就職希望者190名中9人と、わずかではあるが増えている。

そこで本研究では、先に示した2つのテストの関連性を明らかにし、K短期大学の学生の傾向を把握し、その傾向を踏まえて、施設実習がスムーズに実施できるような「施設実習事前指導」をおこなえることを目的とする。

4. EQとCB-Eとの関連性

4-1 調査方法

調査対象者：K短期大学2年生150名（男 11名 女 139名）

調査日：平成19年 4月 10日 ～ 平成19年 4月 13日

調査方法：藤の担当する授業内でテスト用紙を配布、実施し、その場で直接回収

4-2 結果と考察

表1 EQとCB-Eの高低差をあらわしたクロス集計

		EQ-I (共感性)	EQ-II (自己認知力)	EQ-III (自己統制力)	EQ-IV (粘り強さ)	EQ-V (柔軟性)	EQ-VI (楽観性)
f-CP	559高 181低	862 608	689 439	692 488	814 490	666 440	864 589
f-NP	291高 242低	459 1011	384 744	366 814	396 908	370 736	486 967
f-A	514高 191低	739 731	592 536	605 575	683 621	576 530	756 697
f-FC	801高 128低	1062 408	841 287	860 320	953 351	797 309	1085 368
f-AC	624高 165低	919 551	696 432	716 464	814 490	691 415	892 561

表1は、CB-Eテストのf-CP～f-ACまでの高い得点群と低い得点群に分け（高は8点以上の合計、低は8点未満の合計とする）、EQ-I～VIの各項目についてCB-Eテストの高い

得点群だった学生と低い得点群だった学生の合計点を示している。

例えば、f-CPとEQ-Iを見た場合、上段 $f-CP \geq 8$ となった学生のEQ-Iの合計は862点、下段 $f-CP < 8$ となった学生のEQ-Iの合計点は608点である。

4-2-1. CB-Eテストにおける結果と考察

- (1) 得点が1番高い項目は、f-FC（自由な子どもの心）であった。つまり、いつも明るく自由な心を持っているタイプの学生が多いということが証明されたのである。殊に施設保育士は、人を援助する職種であり、入所児や入所者の心を明るい気持ちに導いていくことは重要なファクターといえよう。

2番目に高い項目は、「子どもの心」という点で、1番目に高い項目と共通なところがある。しかし、f-AC（順応した子どもの心）が高いということは、相手の期待に応えようとして、「イヤ」といえないタイプであろう。すなわち、ストレスを溜め込んでしまう結果となる。

これらのことから、K短期大学の学生は、明るく自由な心を持っているがその反面、周りへの気遣いをすることによって自分自身がストレスを抱える傾向にあるともいえる。

- (2) 高い群の得点の中でも最も低い項目は、f-NP（母親のような親の心）であった。この項目は、「養護」的な心を表しており、母親のような大きな心を持ちながら相手を受けられるという優しい気持ちを持っているか否かがわかる項目である。しかし、最も重要である「養護」の心を持っている学生が少ないことが明らかとなった。

この結果については、まだ年齢的に若いということを考慮しなくてはいけないであろう。もう少し、経験を重ねて行くと具わってくる項目だと思われる。

- (3) 3番目に高いのは、f-CP（父親のような親の心）であり、4番目に高いのがf-A（大人の心）であった。f-CPが高いということは理想を持ち、やるべきことはきちんとやる。そして、f-Aが高いということは、やるべきことに対して情報を収集し効率よく仕事をこなしていけるタイプなのである。これらの項目の順位は低いとみがちだが、高い群の得点と低い群の得点の差が大きいという点では、これに該当する学生も決して少なくないといえるだろう。

4-2-2. CB-EテストとEQテストにおける関連性の結果と考察

- (1) f-FC（自由な子どもの心）の高い学生は、EQ-VI（楽観性）も高いという結果が得られた。この2つの項目の間には、関連性があることが証明された。明るく天真爛漫な

子どもの心を持っているということは、のびのびと自由であり、物事に対してポジティブ思考ができるものと考ええる。つまり、施設保育士は、様々な問題や背景を持った人との関わりが多いため、前向きな考えで対人援助をしていくことが求められる。

さらにf-FC（自由な子どもの心）の高い学生は、EQ-I（共感性）も高いということも明らかとなった。つまり、柔軟な心を持っているということは、様々な人の心を受け入れることができ、相手の立場に立って、共に考え問題を解決するような導きができるということである。対人援助にとって、相手の気持ちに寄り添うことは、基本的な事といえる。

(2) f-AC（順応した子どもの心）の高い学生は、EQ-I（共感性）とも関連性があった。相手の顔色を見ながら、自分の行動を決定していく傾向のある順応した子どもの心をもっている学生は、相手の気持ちに應えるために、共感することを努力するであろう。大切なことではあるが、自分の心とは違う行動をすることになる場合もあるので、自己コントロールが必要となってくる。EQ-Ⅲ（自己統制力）の項目を見ると、決して自己コントロールできないようではない。それなりに、状況を判断して行動できるとよいだろう。

(3) f-CP（父親のような親の心）と関連があるのは、EQ-I（共感性）である。良識を持った父親的な心を持つ学生は、相手が求めていることに対して叶えようという、厳しくも理想に沿った行動ができるといえよう。人との関わりの中で、良識的な判断ができることは必要であると思われる。

(4) f-NP（母親のような親の心）の得点が低い群と、EQ-I（共感性）の低い群においては関連があるといえる。K短期大学の学生は、本来必要とされる保護的で愛情深いf-NPの得点が低いと、共感性も低いという結果であった。

最近の大学生の傾向は、対人関係を営むことが苦手であるといわれている。核家族化や少子化に伴い兄弟の減少等々、社会の変化に起因していると考えられる。つまり、若年とはいうものの、人との関係が作りにくい学生が増えてきたともいえるのではないだろうか。

5. まとめ

今回は、情動指数とストレスに対処する行動を親の心P、大人の心A、子どもの心Cの3つの領域との関連性から考察した。

K短期大学における、保育士資格を希望している学生は、相手に寄り添うような共感性や

やさしさをもっている。物事に対してもポジティブな考え方で、明るい学生が多いということが明らかとなった。

しかし、人との関係を結ぶことが苦手な学生も多く、人のお世話をするという「養護」面の数値が低いのが少々気になるところではある。

近年の若者は、「ピーターパンシンドローム」、「青い鳥症候群」等といわれており、大人になりたくない、自由な子どもの心のままでいたいという学生も多いのであろう。したがって、母親のように世話をやいたり、親身になって人の面倒をみることは、苦手という結果に至ったのだらうと思われる。

6. 今後の課題

以上の結果から、今後、「施設実習事前指導」において、対人援助で最も大切な、人とのコミュニケーションの方法が身につくようなことを取り入れたいと考えている。殊に、施設保育士として勤務する施設には、言葉でのコミュニケーションがとり難い方も多くおられる。また、こちらから声をかけても返事をされない利用者もいるであろう。そのような時に黙ってじっとしているのではなく、まずは学生自ら関わるという行動をとれるようにする必要がある。

施設保育士の役割を理解するうえで最も基本的なことは、その子どもや利用者を受容し、個別的理解をすることである。そのためには、深い人間関係を形成していかななくてはならない。そのためには、「施設実習事前指導」において、様々なコミュニケーションの方法を取り入れていくことが必要であらう。まずは、身近な人と言葉を通してのコミュニケーションから始めることを試みたい。さらに回を重ねていく中で、言葉以外のコミュニケーションを学生自身が体験できるような場を設定していくことも視野に入れて、指導していきたいと考えている。

自己を見つめ直すことによって他者理解を深めていき、苦手意識を軽減できるような「施設実習事前指導」を展開していきたい。その結果、施設実習がよりよい実習となることを願っている。

引用文献

- (1) ジョンD. メイヤー他 中里浩明他訳 『エモーショナル・インテリジェンス』
ナカニシヤ出版 2005年 p.5
- (2) 同上書 p.5
- (3) 同上書 p.1
- (4) 芦原睦 『エゴグラム実践マニュアル』 株式会社チーム医療 2006年 p.73

参考文献

- (1) 教育と医学の会 「教育と医学」 慶応義塾大学出版社 2005年
- (2) 高山直 『EQ入門』 日本経済出版社 2007年
- (3) D.ゴールマン 土屋京子訳 『EQこころの知能指数』 講談社 1996年
- (4) 遠藤利彦 『発達における情動と認知の絡み』 北大路書房 2002年
- (5) 宮脇理 『感性による教育』 国土社 1988年
- (6) D.ゴールマン 『ビジネスEQ』 東洋経済社 2000年
- (7) 大島清 『頭をよくするEQ脳の鍛え方』 朝日出版 1997年
- (8) 橋本泰子 『アキバ系の心理学』 萬全社 2006年
- (9) 内山喜久雄他 『EQS』 実務教育出版 2003年
- (10) 松本峰雄 (編) 『教育・保育・施設実習の手引き』 建帛社 2006年
- (11) 小柳晴生 『学生相談の「経験知」』 垣内出版株式会社 1995年
- (12) 久保真人 『バーンアウトの心理学』 サイエンス社 2004年
- (13) 小館静江 (編) 『改訂 施設実習マニュアル』 萌文書林 2006年
- (14) 民秋言 (編) 『保育ライブラリ 施設実習』 北大路書房 2007年